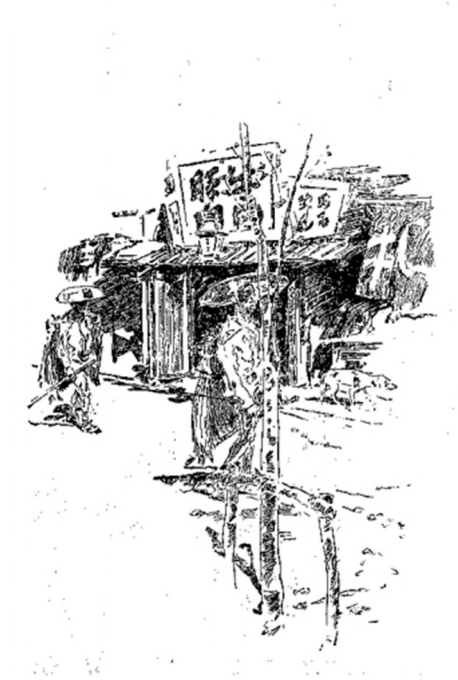
An Artist in Japan
明治日本を描いた画家　ロバート・ブルーム
第二部

文・挿絵ロバート· ブルーム　（Robert Blum）
スクリブナー誌（Scribner’s Magazine）、明治 26 年（1893 年） 5 月号
訳　大野順子 Rothwell *

A daughter of Japan, from a pastel by Robert Blum. Frontpiece, Scribner’s Magazine, Vol. XIII, May 1893, No. 5　スクリブナー誌 1893 年 5 月号の口絵「日本の娘」パステル。カラー印刷が可能になりこの号では表紙のすぐ次のページにこの絵が載った。

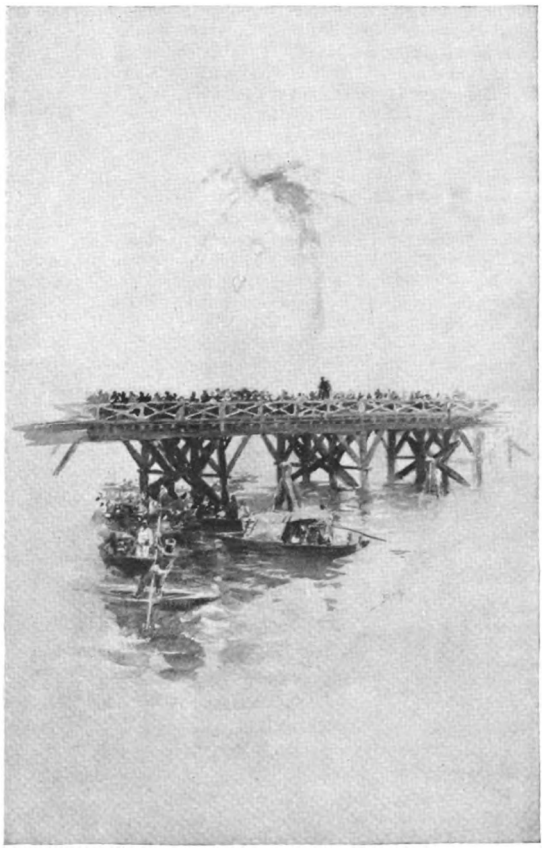
* 翻訳© Junko Ono Rothwell 2014



　東京は暑かった。一か月前の快適な灰色の日々の後、暗くて今にも崩れそうな天気の日がやってきた。かなりの風と雨が続いた。しかし、今、真夏に近づいている。 澄んだ耐え難い空にある太陽の灼熱 はすさまじく苦しめられた。通りは、まぶしくて人通りがなくひっそりとさびれてみえた。　暖簾はだらりと垂れさがり埃っぽく、客によって持ち上げられる事もない。すべてのまばゆい色は逃げ去った。そして真っ白の中に真っ黒な影がはっきりと浮かぶ。 働いている日雇い労働者たちはうだるように汗を流し、まばらな日影を見つけてたびたび休んだ。車屋、日本の御者は　人力車のそばで寝そべったりうずくまったりして物憂げで運賃にも無関心だ。大きな建物の門の影になっている場所に飴屋が座っている。まばたきし、眠気におそわれて首をコックリしている。暑いのでねばねばして溶けていく屋台の商品にハエが群がっても追い払おうとはしない。息苦しい熱気は蒸気が立ちのぼると震え、古い窓ガラスを通して見るように、すべての物体を歪んで見せた。 —　偉大な都市の弱々しい脈。どこでもだるさや虚脱を感じた。お馴染みの行商人、渡り芸人、下駄修理人、お布施を求める僧侶、忙しい商人は姿を消していた。風呂敷を持ってのろのろ歩く丁稚、長旅を決心した、文字の書かれた装束の足を痛めて苦しんでいる埃にまみれたお遍路さんの一行だけが　道に放水している疲れ知らずの人を妨げていた。彼は旧式な放水車を引き、誰もいない大通りを横切り下って行った。　交通の流れは騒がしくはなく今は引き潮のようにまばらで静かになった。唯一、人が出たり入ったりしているのは氷屋だ。たすきを掛けた明るい顔をした女の子が「かんなで削って」器に高く盛ったかき氷を出してくれる。それは冷たくて、焼けるような暑さから一時的に逃げることが出来る。

水遣り･放水車

私はここから逃げ出したいと熱望する。「観光」はもうやった。祭りや花の展示会にも行った。茶屋の夕食の穏やかな乱痴気騒ぎで無鉄砲に放蕩した。芸者踊りの晩餐はその音楽と踊りと同じように本当にいつ本格的になったか分からないうちにもう終わっていた。隙間風の入る内装のお寺の劇場も観た。劇が哀れな最高潮に達した時に涙を流して鼻をかむちり紙の音につれられて　―　多分ほかに理由があったかも知れないが　一　私は自分自身、熱意のほとばしるのを感じた。いろいろな美術展や花火大会も観た。古代の古典的な「能」からは退却した。能を観て悲しくはなったが賢くはなっていない。 骨董品はもういい。私は危険な感情が湧き始めていた。私は仕事に取り掛かることが出来なかった。イライラして好奇心と興味が鈍くなっているのを感じた。すべてが色あせていくようだった。旅行中に起こる小さくて逃げられない不快感が拡大した。じろじろ見られるのには頭にきた。私はこの歪んだ状態で　ただ眼をつむりさえすれば、人がフクロウのようにどちらの方向からでも、横からでも前からでも、頭をぐるりと回してじっと自分を凝視しているのが見えた。



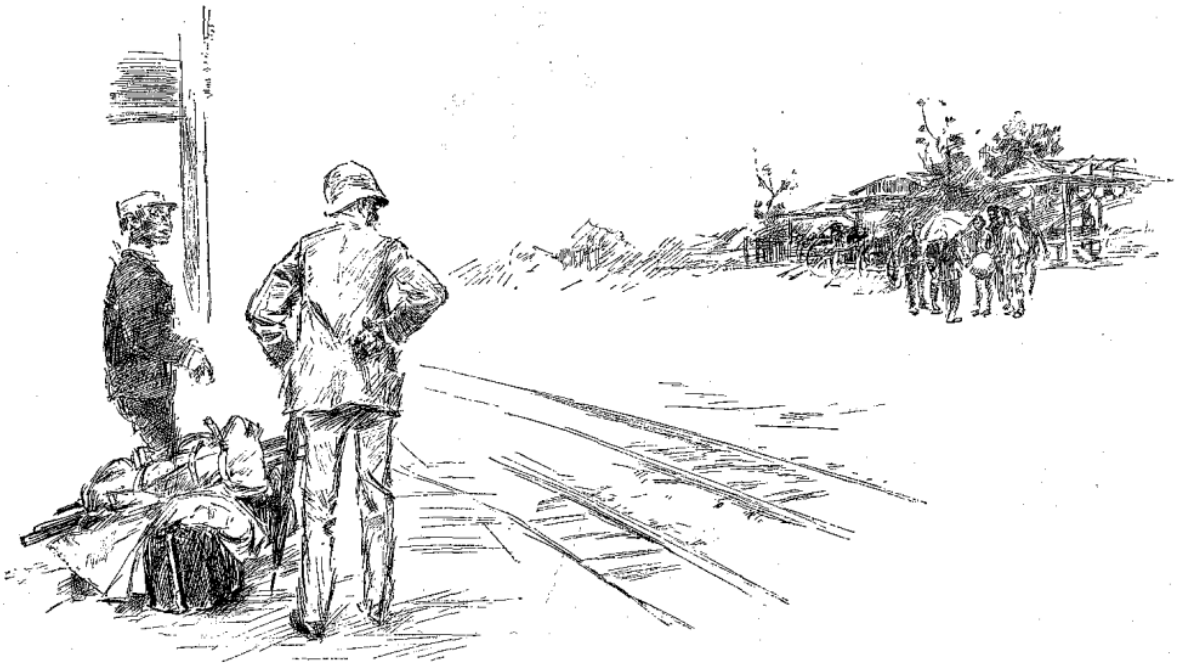
昼間の花火

下駄作り

霧雨の早朝、私のボランティアガイドである新たな友人は　出発する直前になってやっと、江ノ島に向かう列車の二等客車で待っていた私のところにやって来た。旅　—

少なくともどこまで行くのか私はまだ決めていない　―　江の島、箱根、そして富士山のまわりのスケッチに挑戦するようなものだ　―　まだ試していない絵の腕を始動させる試みだ　―　ガトリング砲[1]の代わりにスケッチブックを含む重い戸外での写生道具　―　すべてがうまく行けば列車、人力車、徒歩で敵の国へと遠く冒険に出かける、さらには遠回りして日光まで征服できるかもしれない。

ただ正確にどのようになすべきか、私は知らない。実際、ホテルで戦略を練っている時、ついに私の役に立つようになった葛飾さんが興奮して熱心に「うまくいくための方法」の詳細を述べているうちに　計画はあまりにも複雑になってこんがらがってきた。私はそれが全く無理ではないかと思う時があった。「あ、はい！私は確かにできます。そうですよ、私と一緒、大丈夫！」と彼は言った。彼がそれを強調している間、私には自分自身を世話できる能力があると思い、「なんとかなる」と感じながら、しかし、私は、彼について案じていた。私は市内から逃れたいのだからどこかわき道にそれても問題ない。写生できることが可能な場所ならどこに行くかは重要ではない。そして我々は出かけた。



孤独な小さな駅

まず横浜まで行った。少しの遅延があった。写生道具を棚に持ち上げて、下駄をはいている旅人のために座る場所を作った。そして藤沢へ向かい、八時に到着した。大まかに言えば田舎の駅はどこもそうだが、今まで世界を旅してみてきた小さな沿線駅よりもっと期待が持てそうにない、さらに小さな寂しげな駅だった。　駅の周りはどこも砂の空き地だ。安物のボロの茶屋があちこちにあった。

[1]アメリカで発明された初期の機関銃。

私がバッグや荷物を見張っている間、葛飾さんは　近くにある人力車のたまり場の一つに行った。彼は活気ある値切り交渉の真っ只中だ。群衆は葛飾さん一人を残して、散ってしまった。彼が何か言うとまた戻ってくる。それが何度も繰り返された。とうとう、私はバッグを一つ肩にかけどうなっているのかを見に歩いて行った。

「どうしたんだ？」

「ああ、彼女[2]は言う。行かない！」彼はちょっと群衆から離れてこう言った。私のこれまでの他の場面での彼との経験から　これは値切っているのだなと思い、どのくらい払うと伝えているのか尋ねた。

「1 ドル半以下なら行かないと言う。でも 50 銭ならとても十分。私は思う。」

「それで、江ノ島はここからどのくらい遠いのかい？」

「人力車の車夫は 5 マイルだと言っている。 ―　道はとてもとても悪いと言う。」耳を傾けていると彼は嬉しそうにしかし無感情な顔をして付け加える。「そうら、下がると分かってたんだ、今、もう 75 銭でいいだとさ。」

「ああ、値段は気にしないでいい　―　それでいいじゃないか　―　」しかし彼は値切りたいのだ。彼の方向を変えるのは首輪から外れた犬を捕まえるほどやりやすいことだと私はもう学んでいた。今彼の鼻は犬のように冷やかに最低値を求めて狩りをしていた。

私は、お茶の屋台のじめじめした椅子に座って紙タバコに火をつけ、彼が満足に交渉を終えるまでに　吸い終えた。現在、彼はおとなしそうな明るい車夫を三人連れて戻って来た。世話好きな葛飾さんは喜びにあふれていた。「待たせて申し訳ない。もちろんご存知でしょう。正当な値段以上は払う気はない。」人力車　一つには荷物を積みこんだ　―　我々は他の二つによじ登り、砂だらけの道を進んだ。竹林と孤立した小さな家を通り過ぎた。一か所か二か所、茅葺きの家の小さな集落、道路があるが、道は裏庭の一部でもあるようで、道と家の区別がつかない。

ここは砂の多い土だというのに植物が生い茂っている。太陽が顔を出し始めている。重く湿った空気、それは男たちにとっては仕事では軽いものではなくなる。彼らはやた

[2]「彼」の間違い。葛飾さんは英語がうまくないので“She ”　と“He”を混同する。

らと汗をかく　―　私の車夫たちが休んでいる時、手ぬぐいを出して汗を拭くのを見た。濡れた皿をふいた布と競うくらいの水の量を絞っているのを見た。だからそう言える。―　彼らが休息のため砂の斜面の麓にある小さな茶の屋台で止まった時　私は彼らが休むことが出来るのでのほっとした。彼らはわずかに身に着けていた衣服を脱ぎ、体を擦ったり拭いたりした。座って静かに一杯か二杯、お茶を飲み、しゃべりながら煙管を吹かすのを楽しく見ながら私は「あとどのくらい遠くへ行くのかい？」とさりげなく尋ねた。「ここ、終点　―　これからは歩かねばなければなりません。」私はかなり驚いて、「なぜ、江ノ島はどこだい？ 」と聞くと、葛飾さんは砂山を指さした。確かに砂山に上り見下ろすと長い狭い砂浜があった　―　実際には砂が海に流出する単なる細長い半島　―　島まで四分の一マイルある　―　島のように盛り上がっている　―　江ノ島だ。固い海岸の砂へ向かって下り、海岸沿いに歩くとすぐ上に構築された、というより、この特異な形成の岩にしがみついている町に到達した。我々は、町の入り口の大きな石の鳥居を通過し、急な道を登り、日本ではどこに行っても例外なくおこる四方からの歓迎の甲高い呼び声で迎えられた。狭い通りは　宿屋、茶屋、宿泊施設がその大部分に並んでいて、玄関の前を通過する時　女の子の一団の声が「い - らっーしゃ - い - ！」と非常に多くの一斉射撃のように鳴り響く　―　通過したら止む。が、競争相手の宿が同じように射撃を開始する。 この「射撃」の通りの頂上近くに、我々はエドウィン･アーノルド卿[3]がそう長い前ではない近頃、喜んで客となった同じ茶家　―　岩本楼を見つけた。

エドウィン卿がこの雑誌に最近、達人のペンで「ジャポニカ」の記事をとても魅力的に書いてここを説明したので私がもう一度書くのは不可能だ。あえて言うなら、私はここで絵になる場所をたくさん発見した。また、期待していなかったことだが、私の忠実な友人が私のやりたいことを理解し始めて、私を喜ばせたいと一生懸命行動し始めるのには長い時間はかからなかった。能力を最大限伸ばして創造力を高めることを学んでいき、新しい工夫をした。彼は途方に暮れることはなかった。ただし、*彼に*理解できる程度の英語であれば。私が何を欲しいかをヒントをあげて暗示するだけでよかった。人間の努力でできることならそれはやり遂げられた。二階の部屋からスケッチしたある出来事を覚えている　―　器用な葛飾さんの御機嫌取りによって家全部を文字通り私が使えることになった。ある朝スケッチを完成させるため再びそこに戻った。ところが、通りには何千もの旗が掲げられていて描こうとした景色が見えなくなっていたのだ。それは「祭り」の日でどうすることもできない。多才な葛飾さんは私の目の前からいなくなった。外の家々に彼が出入りするのがちらっとみえた。しばらくして、あちらこちらでどんどんと旗や飾りが降ろされていった。その最中に彼は戻ってきて成功を楽しんでいる微笑みを浮かべて言った。「みんな降ろしているよ」その夕方、宿に帰るみちすがら、皆の親切にふさわしいお礼を忘れなかったかとさりげなく私は聞いた。「ああ、ええ　―　もちろん砂糖をあげましたよ。」　お利口さん。彼は、私がスケッチしていた家の

[3] Sir Edwin Arnold　英国人　詩人、ジャーナリスト。スクリブナー誌に“Japonica”を連載、ブルームはその挿絵を描くため来日した、

一階に行ってその店の砂糖を買ったのだ。店の品を買い上げてくれた優しさで商人は喜び、その後　葛飾さんは近所の人に砂糖を配ってうまくやりくりしたのだった[4]。

日本の寺院

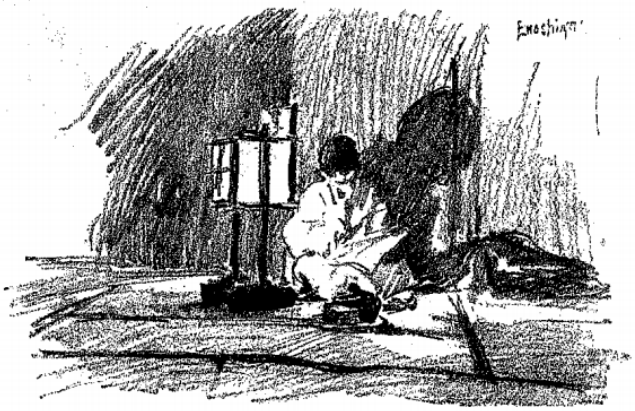
[4] ブルームによる注；彼はその後で説明したように、もちろん祭りなので多くの巡礼が来るので、みんな旗を降ろしたくはなかった。巡礼者は、常に旗の多い宿に行く。団体、クラブや協会、組合の毎年恒例の巡礼は　―　それはたびたび長旅になる　―　クラブや組合など各自の名前が飾られた綿の布の旗を持って来て、神社、寺院、宿にそれらを残して いく。私は何度かこの旗を買おうとしたが断られた。つまり推薦状になるわけだからどの宿にとっても値打ちがあるものなのだ。

以下、 私の日記から引用するので、江の島の魅力の断片的な雑な走り書きしか期待することはできない。おそらく、私の一日の所業を垣間見るだけだろう。

日本の枕

1890 年 7 月 24 日 ―（岩本楼）建て増してまとまりのないホテルの庭から廊下でつながれた小さな建物の二部屋にいる。ここはまだ素人写真[5]のメッカにはなっていない。ホテルの主は外国人のために適当な別館　―　それは空想のままにしてもらいたい　―　を建てたいと思っているようだと K（葛飾さん）が言うのだけれど・・・・朝 10 時に島　―　潮が満ちて海岸の細長い浜の上を海水が覆ったら島になると聞いた　―　の散歩を始めた。洞窟まで行った。少年たちが K が投げた小銭を取ろうと岩の間に飛び込むのを見るのは面白かった。ホテルに 12 時に戻る。オムレツと魚の後、3 時に浜へ。天候は暖かく、無鉄砲にも寝間着で出かけた。いつもの通り、じっと見られたが私が寝間着だからといって特に見られたわけではなかった。そして気持ちよく泳いだ。K の下駄をはく。町に戻る。通りの下の方で自分のために草鞋を一足買った・・・夜のため女中さんが布団を敷きに来た。K は座布団を二つに折って間に合わせの枕を作っている。緑の蚊帳は海藻ときのこの混ざった嫌な匂いがする。夜の準備はそれですんだ。

7 月 25 日 ―　約 7 時 30 分頃目が覚めた。惨めな、何度も目が覚めた眠り　―　体のあちこちがバラバラになったように感じる　―　悲しいことに体の構造にはひどく傷む箇所が何ともたくさんある。いやむしろただ一つ、それは体全体、まつ毛まで痛い。夜中の 12 時過ぎてもずっと遅くまで起きていた。寝具　―　それは柔らかくない　―　に慣れようとして。そしてその中身はノミ、ノミ、ノミだらけだ。 家全体を閉め切っているので息苦しい蒸し暑さだった。服や小間物の大きな梱包箱の中にいるようだった。たびたび目が覚めた。蚊帳の下で K が平和な大きな包みのようにじっと寝ているのをたびたびみると我慢できない気になる。私は最終的ににじり寄って行燈を吹き消した。暗い日、時折雨。縁側から家々や丘の素描をする。4 時ごろ晴れてきた。海岸に沿って散らばっている漁村に向かって散歩した。歩



江ノ島の夜

[5] Kodakistic : この言葉は辞書にない。おそらく「コダック」カメラからきた、写真を撮ることの意。1888 年「 コダック」という名前が誕生した。スローガンは、"あなたは、ボタンを押してください ー後はまかせて“　コダック社が現像、焼き回しを行った。それで素人でも撮影が可能になった。

いていると　旅館、茶屋、そして絵になる寺のある大きな場所に出た。自分のために足袋一足を注文するため服屋に入った・・・・朝は牛乳、お茶、カステラ[6]、昼と夜は魚と卵で私は生きている。晩に按摩を呼んだ。一日中　体がこっていた。

7 月 28 日　―　明るく晴れている、そして気持ち良い。7 時までに起床。いつものとおり K が通りを下った外の店でカステラを朝食用に買ってきた。素描を始めるため K が店の人と話し上の部屋を使用する許可を得た。午後、昨日始めた素描を続けるため弁天様の洞窟に行く。雨が降ってきたので洞窟に避難する。岩に当たって砕ける波を前景に、富士のシルエットが今にも崩れそうな曇り空を背景にして遠くに浮かぶ。今日のご馳走は数切れのパンだ。K が言うには、宿の女将は女性らしい優しいの心の持ち主で、このあたりに住んでいる宣教師から私のためにもらってきてくれたそうだ。布教活動も捨てたものじゃない。

7 月 31 日　―　・・・・たまに巡礼者たちがやってきて町で　バラバラになって歩いている。大きな麦藁笠をかぶり四角のゴザを肩にかけている。粗い白い衣に身を包み時々杖と鐘を持っている。絵になる生活ぶりがちらりと見える。その多くは女性だと気付いた。同じような服装なので離れたところからでは女性と男性を区別するのは難しい。ここは魅力的な場所だ。懸命に数多くスケッチした。　唯一の難点は日本の食べ物だ。それは一本調子よりもっと単調だ。宣教師のパン一片を除き、私はこの 7 日間食べたのは、魚、卵、米、茶だ。組み合わせをいろいろ変えて全て試したがだめで、もう飽きた。胃をだまそうとどの順番に食べてもだめだ。食べ物が貧しいにもかかわらず 私はここに滞在しようと思う。　しかし、外国人のために建て増そうかと夢見ている宿の主に K を通じて　食べ物の苦情を言おうと提案した。何かの理由で彼は文句を言うのは適切ではないと思っている[7]。彼はできるのにやろうとしない。私はもし忌々しい日本語が喋れたら言ってやるのに・・・・風の強い嵐の日。窓からパステルでスケッチをする―パステルは この天気の湿気のせいで粘っこくなった。午後には、岩に行った。水位は非常に高い。それは良かった。私は岩に座り、 雨が降り始めた時には　K が私の頭上に傘をさしてくれたが、それでも風がスケッチブックを持ち上げ、それが膝に当たるので何をするのも難しかった。 K.も気分がすぐれなかったのでしばらくしてあきらめた・・・・

我々はこの魅力的な小さな場所でぶらぶらしたり登ったりスケッチしたりして 10 日ほど素晴らしい日を過ごした。ある晩くつろいで、魚と卵の夕食を食べていると宿の主人が障子を開け入ってきた。膝をつき頭を下げ「お邪魔します」と口の中でもごもごと言った。彼の手には茶色の電報の封筒があった。それを恭しく額のところまで持ち上げきわめて重要なものとして私に渡した。私は封筒を引き裂いてと色のついた紙を

[6] ブルームによる注：カステラはスペイン人の持ってきた“Castilla”- スポンジ・ケーキからそう呼ばれる。

[7] ブルームによる注：彼は文句を言うのは失礼なことだと後で私に説明した。私たちが宿を発つ時になってやっと食べ物についての不満を伝えた。「分かるでしょう、発つまでは何も言いたくなかったのです。もし文句を言ったら宿の主人は私を礼儀正しいとは思わないから」

畳の上に広げて伸ばした。そのピンクの電報用語はあまりにも短く明瞭でこの上なく素晴らしい冗談のようだった。了解、もちろん私は直ちに東京に引き返そう。

花市場

葛飾さんがついでくれた酒を飲みながら、私は言った。「さあ、船頭の娘と東京に乾杯。」―　ちらっと見てこの野蛮人の男の心をどきんとさせたとてもきれいな娘に心を乱したことにふざけて言及した。杯にはほんの少しの酒しかつげないが　東京の川辺の思い出に残る一日以来、これまで何回も彼女のために乾杯したことがあった。

「あなたは思う、東京へ帰らなきゃならないのか？」

「そのとおり、ピーター。アメリカには鬼のような、同情なんか持ち合わせていない、編集者と呼ばれる階級があるんだ。彼らは何か欲しいと思ったら　とにかく欲しくてたまらないんだ，言わば、すぐさま彼らの要求に応じてやれば　こっちはあらゆる点で心地よく楽になるんだよ、ピーター君。」私は彼をピーターと呼ぶことにした。(彼のもう一つの名前は言いにくくて言おうとしても永久に口から出てこない、何もやることのない休日だったら長い時間がかかっても何とか言えるかもしれないが)　「ピーター君、友よ、君は編集者とは金輪際　関わるな！」ピーターは不審な顔をして、関わらないと言った。彼の絶望的な視線を見て説明を続けた。「そうだよ、彼らは私の素描を見たがっているんだ　―　私は東京に帰ってよい絵を描いてアメリカに送らなくちゃいけない。でも元気を出せ、富士を見ないで帰ることはないさ。こんなに近くまで来ているんだから、とにかく富士の麓まででも行こうじゃないか。そのあとで君は私を連れて帰ればいいさ。」

船頭の娘

この魅力的な小さな場所から名残惜しく思いながら出発したのを私は決して忘れないだろう。リボンのような細長い砂浜に沿って、バッグや荷物を積んだ人力車は、砂に足を取られながら先に進んだ。私は頻繁に立ち止まって振り返った。それは想像できる最も美しい朝だった。水晶のような澄んだ空気、太陽はまだ低く、砂浜の最も小さな物体に長い薄い影を投げかけていた。我々自身の影が浜を横切り遠くまで伸びていた。裸の漁師たちが魚を運んでいた。彼らの明るい桃色がかった皮膚は重いインクのような青い海、そして真珠のように白く光りさざめく波と強い対比となっていた。

海の上にはこれまで見たことのなかったようなきれいな鋭い稜線の厳かな富士山が遠くに見えた。二、三の柔らかい綿雲は富士山の額の周りを純粋で静かな空にとろけるように漂っていた　―　子供の幸せな目覚めのように思えた。江の島は寝姿のシルエットで横たわり、あちこちで煙がまっすぐ上に上っていた。まだ陽があたっていない場所の木々や岩は安らかに影の中だ。東側は太陽が光っていて端飾りの刺繍で海岸の下の座礁に当たって砕ける波を金色に染めている。ここを発つにあたって自然が祝福してくれているようだ。親切な友達らしい顔が最後のさようならで微笑んでいる。覚えておいてほしい無言の願い　―　早く帰ってくるようにとのまばゆいばかりの顔で。

我々は湯本に行く朝一番の列車に乗るため藤沢に余裕をもって着いた。起伏の多い丘の田舎を通り短時間で国府津に八時頃に着いた。ここからは、ピーターが言うのは、跳ね回る人力車より新しい馬車鉄道に乗る方がいいらしい。時間はかかるが列車の方が安いと彼は分別顔で指摘した。

天にすべてを任せるのはなんと良い気持ちだ　―　天というのはこの場合は細い体つきのピーターだ。自分で行き方、時間、列車、切符、受取の控えなどすべての情報を調べるのはまごつくし、なんとエネルギーを使うことか。「ここで待っていて。」または「私が戻ってくるまであそこに行って下さい。」と言われるのは気持ちよい。ゆっくり紙タバコに火をつけ、しばらく人々が急いで行きかい、正しい列車を目指してもつれながら向かっていくのを眺めるのは少し意地悪な気持ちだが楽しい。人々が踏まれた蟻の巣のように右往左往している。忙しい駅員が黙って行くべき方向を指さし、人々はそっちへ急いで行く。そして別の駅員がやさしく元来た方を指さす。人々は　今度は元の方へ走る。疲れてあきらめて彼らは自分たちの列車を来るのを待って荷物の傍にしゃがみこむ。三時間後やっと目的地へ行く列車が入ってきた　―　なぜ列車は最初からもっと早く来なかったのか解けない謎を思い起こさせる。人々がどう行動するかという性格のほかに、画家が「ただのもろもろの物」と呼ぶ、人々の服装、色などのすべてを学ぶのは楽しいし役に立つ。単に「はい、ピーター君、いいよ、そうしたまえ」と言えばみんなできるのだ。何をしたらいいか知っていて、うまくいくと自信を持っているふりをしていればいいだけのことだ。宝石のようなピーター。

俳優

どこで　*彼は*情報を得るのか私は知らない。とにかく彼は*手に入れる*、それがもっと重要なのだ。それで今彼が私を迎えに来たので忠実に彼の後ろに従う。群衆をぬって涼しい馬車鉄道のプラットホームに向かった。

「労苦の後での休息の港。[8]」

やっと休めるかと思ったらすぐ出発しなくてはならない。あっという間に車中は混み合ってきた。馬は急に走り出してホームの屋根の下から外へ出た。すぐ鋭い曲がり角にさしかかり無事に通過したが、しかし小柄な御者は手綱を耳の高さまで引っ張った。同じく小柄な車掌は車の後ろのブレーキを効果的に使った。まぶしい場所に出ると馬を好きなように走らせた。そして我々は陽気に走った。埃っぽい道を線路から外れそうによろめきながらシーソーのようにぐらぐらと走った。頭を上下に振り下駄をカタカタならしている静かな乗客はいろいろなタイプのあらゆる性質の人たちだ。袴、羽織の老練な保守的な人から帽子と靴の寛大な自由主義者までいる。色つきシャツ、白の襟、エナメル革の靴の「最新の流行」の改革主義者の見本のような人までいた。袖口、杖そしてスタイリッシュな麦わらの帽子の彼をピーター君は知っていた。会えた喜びでピーターは息をのみ、会釈をしながら　適切な日本のお辞儀に伴う控えめな抑えたような咳をした。それから私の方を振り返り、喜んで興奮した様子でささやいた。「あれは子爵の長男だ」そして興味深い　―　ピーターにとってはとても興味深い　―　ことをいろいろ話し始めた。

停車場に着くと、車掌は馬に水を飲ませるので忙しかった。よく分かっている馬は車掌が柄杓でバケツに水を入れるすぐ口を開いて頭をバケツに突っ込んだ。車掌は片手でこのたぐいまれな動物の舌を取り出してもう一方の手で気前よく岩塩をのせてやり、この仕事を終えた。

---

[8] Edmund Spencer, Poet 1552-1599.より引用。
原文は
“―― the port of rest from troublous toyle."
[“Here may thy storme-bett vessell safely ryde; This is the port of rest from troublous toyle, The worlde's sweet inn from paine and wearisome turmoyle.”

現代の英語では；
Here may your storm-damaged vessel (ship) safely ride.
This is the port (harbor) of rest from troublesome toil (work),
The world’s sweet inn (hotel) from pain and wearying turmoil (chaos).

魚売り

数人の乗客はここで降りた。確かに人々の代わりに隙間があった方がいい。汗が出るほど暑い。我々の仲間はできるだけ快適に過ごそうとした。袴の人は新しく結った丁髷（ちょんまげ）を埃から守るため手ぬぐいを巻き下駄から足を抜き、怒りを鎮めた達磨[9]のように座った。帽子の人は　—　その帽子はよだれが出ているような急須と受け皿のない湯呑といっしょに座席の下に置かれて濡れている　—　靴を脱いで同じようにした。そして小さな煙管を吸っていないときはじっと私を凝視している。清潔ななりの人　(子爵)は離れた隅にいて退屈して寄りかかっていた。シャツの襟は元の状態の輝きを失ってみじめに崩れてきている。みんなは暑いので多かれ少なかれ、服やきものをぱたぱたと引っ張ったりつついたりして風を送っている。燃えるオーブンから逃れたいと熱烈に祈っている。まだ暑さに動じず元気なのはドイツ軍式の帽子をかぶった小柄な御者だった。思いもよらない向う見ずな元気さを出し　あふれんばかりに活気づいて鞭を振り警笛をならしブレーキを引きながら曲がり、我々は突進した。少しばかりの新鮮な空気を吸えるのは御者だけだった。

我々はついに　—　もう一回休止し新しい馬に代えた後で　—　激しく揺れた馬車鉄道の終点に着いた。私はピーターがちゃんと集めてくれた我々の荷物を数えている。

[9] ブルームによる注；日本画でおなじみの人物。手も足もなく袋のような服装で顔だけ出している。荒々しく怖そうな表情。達磨は釈迦の弟子で仏教の教師。中国から来た禅の創始者。